

# 金沢のわき水



## 金沢市

### 作成にあたって

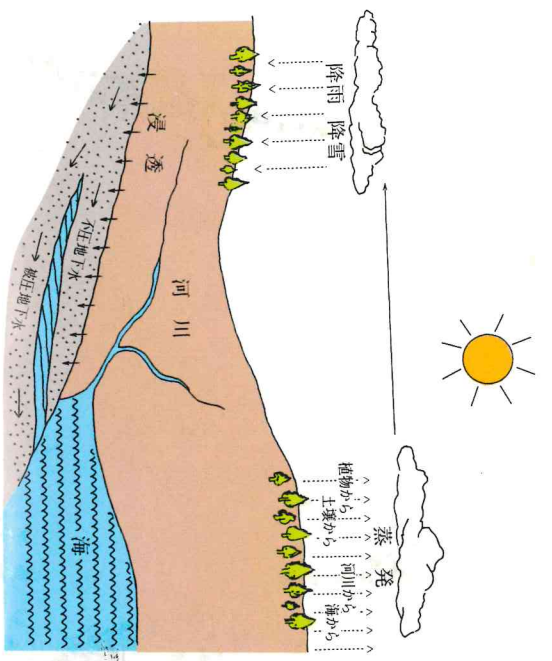
自然が営んでいる水の循環の中で、地下にためられているのが地下水です。淡水の中で私たちが直ちに利用できる地表水と地下水を合わせたものが地下水なので、地下水は水の宝庫といえます。地下水は、豊富な循環性な施設によってそのままの状態です。地下水は、豊富な循環性な地下水資源なので、私たちが自然に流れ出ている「わき水」の恩恵をたくさんつけて生活をしてきました。飲料用、かんがい用、さらに神からの授かりものとしての信仰用にも使われてきました。また、「わき水」の場所には皆の良き交流の場でもあり、日常の生活と根づいたものでもありました。しかしながら、この豊富な財産である「わき水」、も時代の波に押しつぶされて消えていくことは非常に残念なことです。そこで、金沢市では、これまでいろいろな形で水の大切さ、地下水のありがたさを知って理解していただいている「わき水」の主なものの位置を示したマップとそれに説明を加えたパンフレットを作成してみました。このパンフレットによって、市民の皆さんが、あらためてこの「わき水」に関心をもち、地下水に感謝するとともに、「わき水」の維持保全にご協力していただきたいと思います。

- 発行 行 / 金沢市環境保全課
- 監修 文 / 北川 島 俊 耕 明
- 調査 文 / 北川 島 俊 耕 明

〒912-0100 金沢市西念前一〇三街区一 〇七六二 三四一五二二三

太陽のエネルギーをつけて、水は海洋や陸地から蒸発して水蒸気になります。水蒸気となった水は、大気の流れによって移動し、やがて雨や雪となって地上に降り、さらに地表水や地下水になって海洋へと流出していきます。これが自然が営んでいる水の循環で、その過程の中で水は地上の生命を生き、育て、環境を維持し、自然を浄化しているのです。

### 水は循環しています



水量はきわめて豊富である。

このわき水の地下にあって、ここよりも低い笠舞や城南の集落付近の崖地にもあちこちにわき水がみられる。笠舞集落から城南への途中にある「くらがり坂のわき水」もその一つであるが、住宅の増加とともにその水量が減少しつつある。

### 閑話休題

「泉の地名の由来」  
泉、泉野、米泉、増泉など泉の町名が多い。この地帯は、かつてわき水があったといわれる。しかし、どこにでもあったのではなく、数が少なく、その貴重さから「泉」の名を付けて呼ばれていたようである。

### 11 法島不動尊のわき水 (法島町484)

十一屋小学校横の八幡神社裏の階段を下りたところにある。崖一面からのわき水を集めて祠の手水鉢に入れており、眼病に効くといわれている。

ここにまつられている不動尊は、明治44年(1911年)百間堀埋め立ての際に掘り出されたものである。

ここから西大桑町にかけての崖せいには、このわき水と同じようなわき水が点在しており、現在は、主に、畑の灌漑や庭園の池の水などに

### 12 上の清水 (栗崎町へ73-1)

砂丘からのわき水で、同じようなものが以前はこの付近に数カ所みられたが、現在ではここだけになってしまった。後方約5mの集水ますより引いている。むかし、殿様の飲用に供されたとの言い伝えがある。



### 13 もつくり群

自噴井からわき出している様子が「もくもくと」、「もつくと」と、「こんもり盛り上がり」と、「むつくりと膨らんで」などと表現されるような状況なので、一般に「もつくり」などと呼ばれている。

かつては、灌漑用や家庭用として頻繁に使用

水系からのものであり、その外は、犀川あるいは浅野川水系から



★これまで紹介したの外にも、曲子原寺、釣部、砂子坂、戸室別所、湯谷原、湯涌地区、銚子、清瀬、倉ヶ嶽など地や鈴見、田上本山、山科、窪、西どの近郊地にも豊き水があります。

# 金沢の 主な わき水

## 1 塚崎のわき水 (塚崎町ト)

県立金沢北陵高校の南東にある。丘陵の地下水が崖の裾からわき出ているもので、上方にある杉林が水源かん養林になっており、水量は豊富で、道路の消雪などに利用されている。



## 2 神谷内の自噴井群 (神谷内ト、リ)

神谷内集落のうちの柳橋川右岸に点在し、掘り抜き井戸から自噴しているものである。現在では「イトの水」と呼んでいる。水量は豊かであり、かつては、飲用、洗面、洗たくなどに使われていた。現在でも、鎌などの農具を洗ったり、西瓜などを冷すのに使われている。今後も

そっと残したいものである。以前よりは自噴の量が減り、柳橋川左岸にあったものは消滅したとのことである。



## 3 小金の泉 (小坂町東141)

裏山から出るわき水で、水量は少ない。「小金の泉」の小金とは、小坂町が旧の小金村であったので、それにちなんで名付けられたものである。



近くの御所町の加茂神社の境内にも「椎木水」というわき水がある。

## 4 鳴和の滝 (鳴和町ウ117 甲 鹿島神社境内)

神社の横にわき水による湿地があり、その水を笕で引いて雄藩・雌藩にしている。「鳴和の

## 6 石浦神社のわき水 (本多町3-1-30)

本多の森の崖からのわき水で、浅い池になっている。水生生物も生息している。



## 7 金城霊沢 (兼六町1 兼六園金沢神社横)

金沢の名のいわれとわき水となっているわき水である。井戸の胴が直径153cm・深さ180cmで、その下方120cmには丸石が詰められている。小立野段丘からのわき水と考えられる。井底からわき出していて、真夏でもかえることはない。茶会の水として使われており、寒の季節の冷たい水は文火財など保存用の正麩糊を作るために使われている。



滝」の鳴和とは、加賀の国の守護・富樫介と義経一行が、この滝の上で酒宴を催し、弁慶が舞いながら語ったと伝えられることから名付けられた。茅疹、眼病に効くといわれている。



## 5 卯辰山花菖蒲園のわき水 (末広町)

卯辰山「もみじ谷」の谷頭部の崖より一面にわき出しており、花菖蒲園の水源として使用されている。

いしかわ動物園の水族館にもこれと同じようなわき水があり、魚の飼育に使用されている。その他に、浅野川ぞいの山麓部や東山・山の上町など、卯辰山の周りにはいくつものわき水がある。



## 9 旧長谷川町の清水 (笠舞2-17-5横)

小立野・古府線が小立野台地から下りてくるころの南側の崖下にある。かつては、自然の崖に節抜き竹を埋めて水を引いており、旧長谷川町の10数軒で飲用をはじめ、生活一般に使用されていた。昭和63年(1988年)小立野・古府線が完成したとき、ここが、コンクリートの擁壁となり、道路の下にパイプを埋めて、水を引いている。水量は豊富で、現在は、洗たく、消雪、植栽への散水、西瓜などを冷すために使用されている。

このような小立野台地の崖ぞいには、石浦神社のわき水から大清水まで多くのわき水がみられる。



## 10 大清水 (笠舞1-21-14横)

市街地にある代表的なわき水である。わき出し口を石垣にし、その前面に一辺およそ8m、深さ120cm位の浅い三角形の立派な池が作られている。近くの32軒が維持管理をしている。洗たくのすすぎ、野菜洗いなどに利用し、交流の場ともなっている。



これやこの 百万石の 種井かな 島林 甫立



### 閑話休題

「金沢の名の由来」

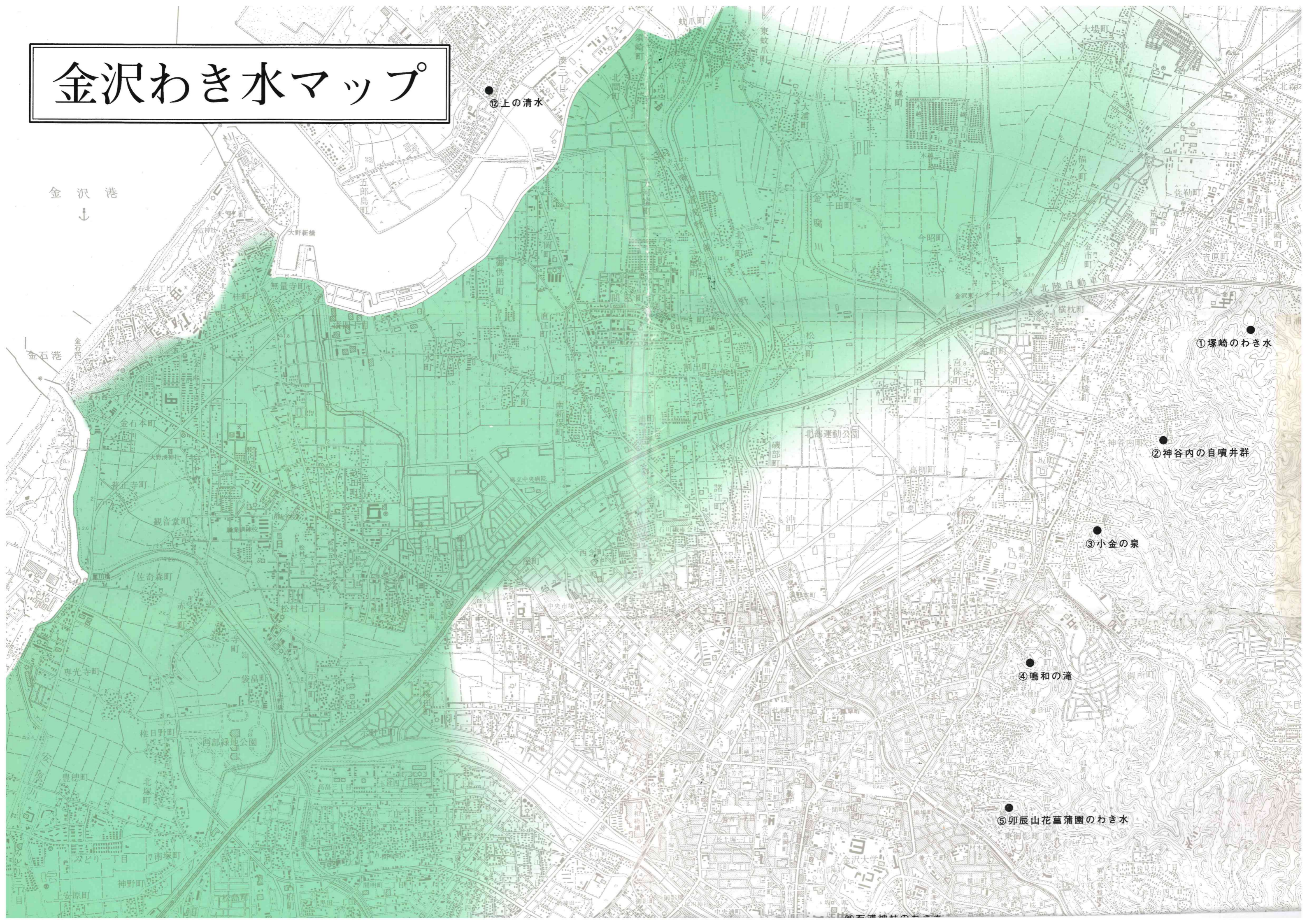
むかし、むかし、富樫の郷、山科の里(現：金沢市山科町)に芋掘り藤五郎という若者がいた。掘った芋を売って生活をしてきた。あるとき、砂金をみつけて洗ったのがこの池である。

## 8 馬坂不動寺の霊水 (宝町7-23)

むかし、草刈りの馬が通ったと伝えられる馬坂の途中に、竜頭の笕より滝のように流れ落ちているもので、不動尊をまつている。水源は、小立野段丘からわき出るわき水を高源院の後ろの崖より集めているものである。近くの木曾坂ぞいの崖にも同じようなわき水がみられる。



# 金沢わき水マップ



⑫上の清水

①塚崎のわき水

②神谷内の自噴井群

③小金の泉

④鳴和の滝

⑤卯辰山花菖蒲園のわき水

金沢港  
↓

金石港

金石本町

観音堂町

佐奇森町

維日野町

北塚町

みどり一丁目

神野町

無量寺町

観音堂町

袋島町

西部緑地公園

南塚町

古町

桂町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

御供田町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

直江町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

大友町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町

古町

南新保町

観音堂町

示野町

示野中町

南塚町



青緑色の部分は、かつて“もっくり”がみられた範囲を示す。

### 「わき水」って何？

湧泉、湧水、湧き水、清水、池などと普段何げなしに呼ばれている“泉”のことです。“泉”は地下水が自然に地中から地表、湖沼、海などに流れ出る現象ですが、私たちはあまり明らかな意識なしに、地下水が流れ出ているところ（地下水の露頭）と流れ出ている地下水の双方に対して使っているようです。

専門的に表現すると、“泉”は、その流出形態から、崖や岩の裂け目から湧出するもの（迸出泉）、盆状のくぼんだ底から湧出するもの（池状泉）、湿地を形成するもの（湿地泉）に分けられています。また、湧泉とはわき水の存在する「場所」、湧出とは地下水がわき出す「こと」、湧水とはわき出した水その「もの」と理解すればよいでしょう。

### 金沢のわき水のしくみ（湧出機構）

#### 1 台地・丘陵や山地の崖地部からの湧出

小立野・笠舞などの段丘台地、寺町台地とその末端部、森本・卯辰山・富樫丘陵などの近郊の丘陵とその周辺、これらの丘陵地よりさらに山手の山地にみられるものです。

金沢市街およびその近郊の丘陵・台地は、比較的新しい地質時代に生成された、まだしっかりと固まっていない堆積層でできていますので、そのうちの砂層や礫層の中には地下水（層状水といいます）が含まれています。この地下水が粘土などの難透水層の上面のところ（図-1）や地形の変換点など（図-2、図-3）から自然に地表に流れ出てくるといった仕組みです。一方、山地では固まった固い岩盤が多いので、その割れ目に入っている地下水（裂か水といいます）が地形の変換点などから

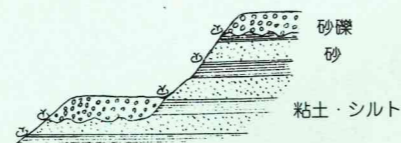


図-1 地層境界からの湧出

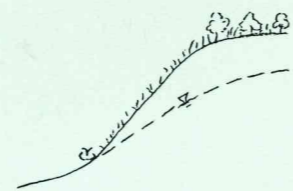


図-2 地形の変換点からの湧出

自然に流れ出てくるわけです。（図-4）

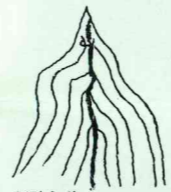


図-3 谷頭部（源流部）からの湧出

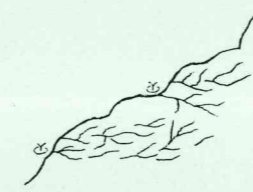


図-4 岩盤の割れ目からの湧出

#### 2 砂丘からの湧出

安原から粟崎にかけての海岸線ぞいにある砂丘の凹地に湿地または池となっているもの、あるいは内陸側の裾部にみられるものです。普正寺町の野鳥園近くの池は前者のものであり、粟崎から北に続く内灘砂丘の内陸側裾部にそっていつかみられるわき水は後者のものです。いずれも砂丘砂層の中にある地下水（圧力を持っていないので不圧地下水といいます）が自然に地表へ流れ出たものです。（図-5）



図-5 砂丘からの湧出

#### 3 “もっくり”からの湧出

厳密なことをいえば、自然にわき出るわき水とはいえませんが、主に、国道8号線より海側にみられ、昭和40年代の初め頃まで存在していました。自噴井（一般に掘り抜き井戸といいます）から地下水を噴き出しているところ、あるいはその地下水を“もっくり”とっていました。

竹筒などで難透水層を貫通させ、その下にある帯水層の中で押しこまれて圧力を持つようになっていた地下水（被圧地下水といいます）が地上まで噴き上げている井戸を自噴井といます。（図-6）

“もっくり”についてのいわれ等の説明は、裏面に記載してあります。

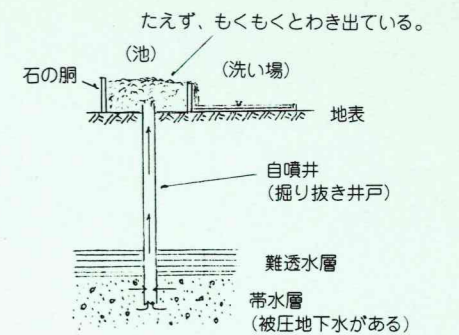


図-6 もっくりの仕組み